

# 支那派遣軍の復員について

日中戦争史研究会 2013.5.18

愛知大学 三好 章

※ 本報告は未定稿のため、引用などは、固くお断り致します。

はじめに

- ・「復員」と「引揚げ」
    - ・地域により異なる状況
      - ・「満洲」の混乱……ソ連軍の侵入：既成秩序の解体
      - ・秩序ある「中国本土」……支那派遣軍 120 万はほぼ無傷
        - ・軍機構の存続
    - ・「復員」「引揚」の概念規定
      - ・小林英夫……軍は「復員」、民間は「引揚げ」  
小林英夫、柴田善雅、吉田千之輔『戦後アジアにおける日本人  
団体 一引揚げから企業進出まで』ゆまに書房 2008.3
      - ・加藤陽子……あいまいなまま  
加藤陽子『戦争の論理 日露戦争から太平洋戦争まで』勁草書  
房 2005.6
- ⇒単純な結論：平時から「動員」し、参戦し、「復員」して平時に戻る  
∴ 軍に関して「復員」  
(陸軍省→第一復員省、海軍省→第二復員省) →復員庁→厚生省第一復員  
局→厚生省援護局 (春川由美子「復員省と占領政策」)

「一般的に『復員 (demobilization)』とは、『動員 (mobilization)』の対語として、『戦時編制下にある軍隊を平時体制に復帰させる』ことを意味する。しかし『引揚げ』という用語があいまいに用いられてきたのと同様、終戦に伴う日本軍を主体とする『復員』もまたその定義は必ずしも一定ではない。厚生省援護局編集の『引揚げと援護三十年の歩み』によると、陸軍において元来『部隊』について用いられた『復員』が、部隊としての機能を失って海外から帰還するものが多かったために『個々の軍人軍属』についても用いられることとなり、帰還した軍人軍属がその身分を解除されることもまた『復員』とよばれることとなった。」(浜井和史「史料解題『復員関係史料集成』ゆまに書房、2010年4月、pp.163～164」)

- ・岡村寧次支那派遣軍総司令官の回想

「支那派遣軍は自軍が敗れて降伏したのではなく、国が降伏したのにつれて、已むを得ず降伏したのであるから、その姿勢は整っていたし、また一方中国側は、降伏した日本軍を解体して将兵を別々に収容する俘虜の形式を採らず、徒手官兵（武装を解いた将兵）の名目とし、私以下指揮官の権限を続けさせ、軍自体の復員業務をも許可し、日本軍民の引

揚げに非常の努力を払ってくれたので、復員引揚は概ね順調に運び、これに関連する諸記録も大体よく整備されたのであった。」(『岡村寧次大将資料』 p.1.)

・加藤陽子『戦争の論理』

「軍の機構がそのまま引揚の機構になる点については、意外な感じもする。しかし、アメリカの三省調整委員会の9月5日決定も、武装解除・復員について効果が期待できるならば、統帥機構を利用することを許していた。」<sup>(1)</sup> (p.225)

⇒軍以外に、特に国外にある軍を本国に還送しうる機構はないのではないかと？

・小林英夫・柴田善雅・吉田千之輔編『戦後アジアにおける日本人団体—引揚げから企業進出まで』

「1945年8月以降の日本「本土」以外の地、すなわち「大東亜共栄圏」にあった日本人は軍民あわせて650万人から700万人にのぼり、うち約半数の300万人から320万人が民間人であった。」<sup>(2)</sup>。

⇒帰国させねばならなかった「総数」

・復員関係の研究史……文献等、詳細はレジュメ末尾参照

- ・『戦史叢書』……『昭和20年の支那派遣軍<2>—終戦まで』昭和48年3月
- ・『ゆまに本』……『復員関係史料集』全12巻、うち中国第1～5巻、南方軍第5～8巻、美山要蔵日記第9巻、復員史第10、11巻、河辺正三日記第12巻、解題は第12巻
- ・『現代史資料』……『太平洋戦争 4』みすず書房、1972年12月  
・宮崎舜市報告などすでに収録
- ・稲葉正夫編『明治百年史叢書 岡村寧次大将資料 戦場回想編』原書房、昭和45年2月

1. 今井武夫について

- ・『支那事変の回想』(『日中和平工作』)

※ 日記……今井武夫氏長女俊子さんが保管、三男貞夫氏が整理

現在：国会図書館憲政資料室で整理中

cf. 今井貞夫インタビュー「『幻の日中和平工作』を執筆して」聞き手三好章・広中一成(『中国 21』Vol.31、「『帝国』の周辺—対日協力政権・植民地・同盟国—」2009年5月)

【今井武夫略歴(『今井武夫関連文書目録』による)】

1898.2.23 長野県上水流郡朝陽村大字北長池 今井熊太郎、さくの四男として誕生

1901.4.15 母 さく死去(39才)

1904.4 長野県上水流郡朝陽尋常小学校入学

1910.3 同校卒業

1910.4 長野県立長野中学(現県立長野高等学校)入学

1915.3 同校卒業

- 1915.3 陸軍士官学校招募試験合格（試験会場：新潟県高田市）
- .4 長野県上水流郡神郷尋常高等小学校代用教員（半年間、2年生担当）
- .12 陸軍士官候補生として富山歩兵第69連隊入隊、陸軍一等兵  
入隊当時、69連隊は平壤駐屯中のため翌年4月迄朝鮮で訓練を受ける
- 1916.8 陸軍上等兵より伍長昇進、下士官となる
- 1916.12 市ヶ谷台の陸軍士官学校入校、陸軍軍曹
- 1918.5 陸軍士官学校卒業（30期）、見習士官
- .12 陸軍歩兵少尉
- 1921.3 シベリア出兵編制令下令
- .4 シベリア出兵のため屯営出発、第69連隊旗手、浦塩港上陸
- 1922.1 シベリア、シコトワにて迎春
- .3 陸軍歩兵中尉
- .10 浦塩港出発、富山県七尾港上陸、屯営帰還
- 1924.3.13 父 熊太郎死去（72才）
- 1925.5 宇垣軍縮のため富山歩兵第69連隊廃止、朝鮮会寧歩兵第75連隊付
- .8 陸軍士官学校予科生徒隊付、陸士第41期予科第3中隊第4区隊長
- .12 陸軍大学入学（校長：渡辺錠太郎）
- 1926.1 太田きみ子（19才）と結婚、高円寺に新居、歩兵第75連隊付
- 1927.7 陸軍歩兵太尉 歩兵第75連隊大隊副官
- 1928.3 歩兵第75連隊第11中隊長
- .10 長男 宏誕生
- .12 陸軍大学卒業（40期）、徽章授与
- 1930.7 長女俊子誕生（朝鮮会寧にて）
- .8 75連隊大隊副官 参謀本部付として三宅坂勤務、目黒駒場に転居
- 1931.3 参謀本部員（支那班）、三月事件（長勇より具体的計画打ち明け）
- .9.24 柳条湖事件のため、参謀本部より橋本虎之助第二部長（少将）、西原一策・遠藤三郎（少佐）とともに満洲へ調査に出発
- 9.28 一行、奉天着、三宅光治関東軍参謀長と会談
- 10.8 石原莞爾中佐に錦州爆撃の目的を聞くが、はぐらかされる
- 10.16 一行帰国（遠藤少佐のみ残る）、帰途、京城で「十月事件」発生を知る
- 10.17 帰京、朝日新聞高宮太平記者に十月事件の取材を受ける
- 12.12 参謀本部付仰付（支那班研究員）、中华民国へ単身出張命令（～1933.10.25）
- 1932.1.1 大連經由天津着、初めて華北に入る、翌日北平入り
- .3.2 山東省済南着、石友三、程希賢に会う
- .4.29 天長節、菊池武夫大佐とともに張宗昌を訪問
- .8 大連、旅順
- .9 上海着
- .10 山東省曲阜、高密、濰県へ
- .11 上海、江湾競馬場（上海事変戦闘跡地、戦略要地）
- 1933.1.10 大連北支出張、義勇軍の帰順勧誘

- .1.16 天津着（帰来）、上海へ
- .1.24 福州へ
- .3.10 陸軍記念日、広州
- .5.11 澳門 英仏中境界へ出張
- .5.24 長勇とともに武昌、漢口へ
- .5.29 長沙より九江へ
- .5.30 廬山登山途中、汪兆銘、孫科、羅文幹等が下山するのつれ違（日支停戦交渉のため、蒋介石との会談後）、翌日の停戦交渉成立を察知
- .6 南京：市内各所探索（～.6.10）
- 6.11 広東発、香港經由厦門へ、上海帰還後、帰国
- 7.12 参謀本部付奉天特務機関員、新京、吉林、哈爾浜、齊齊哈爾、洮南、熱河、錦州を経て奉天に戻る
- 8.1 陸軍歩兵少佐
- 1934.3.5 参謀本部員（支那課）
- 1935.6.9 次男 信男誕生
- .7.19 長男 宏病死（6才）
- .12.2 中華民國在勤帝国大使館付武官補佐官（北平）発表、家族ともども赴任
- 1936.11.1 冀東政府及民衆代表 板垣征四郎將軍歓迎会
- .6.4 松室孝良北平特務機関長（少将）と共に蒙蔵ラマ代表と懇談
- .6.13 喜多誠一支那公使館付武官（少将）、雨宮巽南京駐在武官（中佐）と共に南京孔祥熙別邸滞在の蒋介石を表敬訪問
- .7.29 冀察政務委員会宋哲元委員長による松室孝良少将歓迎宴会
- 8.19 " " による駐中華民國大使川越茂歓迎宴会
- 11.1 冀東銀行総行開幕典禮に出席
- 1937.6.27 北平にて大谷光瑞と会う、日中衝突の予測を聞く
- .7.3 河北省主席兼第37師長馮治安中将与保定へ、盧溝橋での日本軍実弾発砲不法事件を聞く
- .7.6 冀北保安隊司令石友三中将来訪、盧溝橋での衝突を聞く
- .7.7 盧溝橋事件
- (中略)**
- 1944.9.30 大東亜省参事官依願免官、氏は派遣軍参謀副長
- .9.2 上海へ赴任
- .9.4 畑俊六総司令官に報告「8月30日決定の重慶工作（実施要綱）は、全く小磯国昭首相の発案にして、その根源は緒方竹虎の意見基き、組閣当時より発生するもの」
- .9.30 中華民國在勤 帝国大使館付駐在武官（南京）兼務
- .12.10 谷正之大使と共に繆斌工作を小磯首相に訴える
- 1945.4.28 支那派遣軍総司令部の和平工作解禁
- .7.8 周家口にて中国服に着替える
- .7.9 何柱国上将との会談（河南省新站集汜東区司令部）（～.7.10 都合4回）

- ・通訳に藤堂明保（『支那事変の回想』では「今井保明」）
- .7.18 河辺虎四郎参謀本部次長（中将）、南京来訪、何柱国上将との会談を報告
- 8.8 予定していた中国第三戦区司令長官顧祝同との会談（浙江省桐廬）、延期
- 8.14 終戦の詔書
- 8.15 支那派遣軍幕僚会議、投降・武装解除に服することを決定
- 8.17 天皇名代朝香宮鳩彦王、南京着、聖旨を傳達
- .8.21 芷江（湖南省）にて終戦予備会談（～.23）
  - ・中国側：陸軍総部参謀長冷欣中将
  - ・米国：バトラー准将
  - ・日本側：支那派遣軍参謀副長今井武夫、橋島芳雄中佐、前川國雄少佐
- .8.24 陳公博の依頼で日本行きの手配
- .8.30 南京に渉外部設置、渉外部長、旧日本大使館内
- .9.9 支那派遣軍受降書調印式（南京）
- .9.10 何応欽の招きで岡村寧次、今井武夫、小笠原清、会談に赴く
- .11.8 武装解除、軍刀、拳銃など取り上げ
- .11.17 内地への帰還船第1船 LST 出発
- .11.20 支那派遣軍総司令部の元国民政府外交部庁舎返還命令
- .11.30 秦徳純国防部次長訪問、互いの祖国再建を誓い合い、紫檀の杖を托さる
- 1946.7.1 南京連絡員（南京日本官兵、善後総連絡班）として 12 月 31 日まで南京市鼓楼区金銀街 4 号に居住
- .9.19 南京総連絡班記念写真（岡村大将含め全 16 名）
- .10.10 双十節、中山陵参拝
- .12.27 上海出発、LST にて帰国の途に
- 1947.1.1 佐世保沖にて上陸待機のまま新年を迎える
- .1.5 佐世保入港後、全員拘束、予備役編入
- .1.16 戦犯容疑者以外全員帰郷許可
- .1.23 汽車にて長野に向かう

**（以下略）**

1. 1945 年 7 月～9 月までの支那派遣軍の状況

①日本側史料状況

- ・今井武夫『日中和平工作』
  - ・河南（安徽）新站集<sup>③</sup>会談……何柱国工作（1945 年 7 月）
    - ・楊揆一が関与：重慶と通じる
- ・岡村寧次日記
- ・昭和 29 年 今井武夫報告『支那派遣軍復員前後の概況』
- ・昭和 30 年 宮崎舜市『支那派遣軍の終戦並復員概況』
- ・終戦および復員に関する今井日記の範囲：昭和 21 年 6 月～22 年 1 月
  - ・総員復員後の状況
  - ・宮崎舜市報告……ゆまに本＋現代史資料『太平洋戦争 4』

・「岡村寧次日記」……総連絡部撤収後も残留

- ② 最後の和平工作……何柱国上将との新站集会談
- ③ 受降調印式

## 2. 総軍引揚げ後の南京

### ① 総連絡部の設置

⇒『日中和平工作』

「日本人還送業務は意外に進捗し、昭和 21 年 6 月には、早くも 200 万に上る大陸在留民の大部の輸送を終わった。然るに 7 月 1 日午後になり、派遣軍総司令部は、中国陸軍総部に代り日本軍帰還業務を行っていた中国国防部から、突然今夜中に上海へ向かって出発するよう、公式命令を受けた。」(p.244)

### ②各地との連絡

#### ② 国民党幹部との友好的交流……ノーサイド状態

- ・相互に陸士、陸大の先輩後輩……何応欽、秦徳純
- ・降伏文書調印式……国民党はラウンドテーブルでやりたがった  
→米の反対：勝者と敗者の区分け
- ・しばしば繰り返される宴会

「支那派遣軍百五万の将兵は降伏し、武装解除されたのだから、法的には捕虜であるが、事実上は拘禁されることなく、徒手官兵の処遇を受けた」

(『岡村寧次大将資料』 p.68)

- ・日本軍将兵への雑費支給（毎月：昭和 20 年 11 月 26 日訓令）  
「将官八千元、佐官四千元、尉官二千元、下士官四百元、兵二百元」  
(同前 p.75)

「この金額は、中国正規軍将兵の給料と同じであった。」

(黄自進『蒋介石と日本一敵と友のはざままで』 p.190)

#### ③ 戦犯裁判

- ・戦犯裁判……酒井隆中将の処刑：急ぎ過ぎた感あり（森久男説）  
根本回想録：酒井隆が「八路軍と関係」（『軍事史研究』）
- ・黄自進『蒋介石與日本』

#### ④ 総連絡班の日常生活

⇒「われわれは毎週のように会合して大いに歓談したが、その結果われわれ攻撃側の日本軍人に比べ、当然の事ながら、国土を侵略され郷土を追われた彼等中国軍人が悲惨な境遇に身をおいた実情を知り、彼等は屈託なく話すのが常だったが、我々はその都度身の置き場に窮する思いであった。」(『和平工作』 pp.240)

⑤ 中国各地の状況

- ・悲惨な満洲
- ・山西残留……『蟻の兵隊』：宮崎参謀、城野宏、河本大作
- ・満華国境守備隊……対ソ防衛：拒否

3. 支那派遣軍降伏の相手……中央政府、および中央軍

- ・cf. 新四軍軍使章克（もと、ボロディンの秘書）……鉛筆書きの「降伏命令書」  
⇒南京の総軍に追い返される

「南京対岸の揚子江北岸地区には、予て中共の新四軍が浸透していたが、8月15日正午、終戦の大命が発せられた数時間後には、逸ち早く、汚れきった便衣を纏った苦力のような服装の男が、突然総司令部の門前に現れた。

誰何する日本軍衛兵に対し、自ら新四軍の軍使と誇称し、岡村総司令官に面会を強要して止まない。余り執拗な要請のため、改めて其の要件を質したら、日本軍の兵器没収を要求した鉛筆書きのメモを提出した。

勿論日本軍の相手とすべきものは、中国正規の政府軍であって、妄りに中央軍以外の地方軍と交渉すべき筋合いでないから、回答を拒否したが、この自称『軍使』は、曾て国民政府が第一次容共政策の実施当時、ボロジン顧問の秘書として活躍した章克であったという。

章は日本軍総司令部で目的を達成できなかったのも、更に日本大使館に出かけて策動したが、ここでも相手にされず、空しく立ち去っていった。」（『和平工作』p.202）

【朝香宮殿下に対する派遣軍軍情報告】

「支那派遣軍通告」（8月17日10時）

「派遣軍は大本營の厳肅なる統帥命令に基づき既に現配置を以て停戦体制に轉移せり。然るに中国軍隊中局地指揮官の命令なりと稱し津浦線沿線地区、揚子江沿岸地区等に於て日本軍に対し不法攻撃態勢を示し、或は武装解除を求むるものあるは我派遣軍の甚だ遺憾とする所なり。

派遣軍は肅然たる軍紀の下に一に本職の命令に基き挙措進退を律し、今後停戦協定の成立に基き逐次所要の実行に轉移すべく他の容喙は断じて許さず。

右中国軍隊の不穩行動は固より蔣委員長の命令にあらざるべしと確信するを以て、蔣委員長は速に中国軍全部に対し末梢部隊に至る迄即時現態勢を以てする停戦実行を徹底せしめられんことを要請す。

自今右不穩行動を継続する者に対しては蔣委員長の命令に服しあらざるか其の意図外に出であるものと見做し、派遣軍は已むを得ず断固たる自衛行動に出づることあるべし。

右報告す。

……

臣 寧次

（『現代史資料(38) 太平洋戦争(4)』pp.474～478）

#### 4. 本土到着

- ・佐世保、南風崎からの帰還

#### 小結にかえて

- ・軍の復員が、軍組織を用いずして可能なのか？他の、代替物があるのか？
  - ・加藤陽子 (p.225) ……「軍そのものが「引揚げ組織」となることは意外」と見る方が、現実がわかっていないのではないか。イデオロギッシュな軍批判になりかねない。
- また「講談本が判断に影響することもある」(p.256)
  - 批判的に書いているが、それなら『ガリア戦記』から受ける影響はよいのか？その根拠は？⇒「司馬史観」批判のつもり？
- ・今後の課題
  - ・「以德報怨」について
    - ・国共内戦とのかかわり……今井が目撃した国共相克
    - ・「留用」「徴傭」問題
    - ・「山西残留」
  - ・「復員」「引揚」の地域差の整理と比較
    - ・「復員」「引揚」者の戦後史
  - ・汪政権、および関係者のその後

#### 【参考文献・史料・先行研究】

- ・近代日本資料研究会（代表伊藤 隆）『今井武夫関係文書目録』2007年8月
- ・今井武夫『支那事変の回想』みすず書房、1964年9月
- ・今井武夫『日中和平工作 回想と証言 1937 - 1947』みすず書房、2009年3月
- ・今井貞夫『幻の日中和平工作 軍人今井武夫の生涯』中央公論事業出版、2007年11月
- ・門間理良「利用された敗者—日本軍武装解除をめぐる国共両党のかけひき」  
(戸部良一・波多野澄夫編『日中戦争の軍事的展開』慶應大学出版会、2006.4)
- ・軍事史学会編『第二次世界大戦（三）—終戦—』錦正社 H7.9
  - 明石陽至「太平洋戦争末期における日本軍部の延安政権との和平模索—その背景」
  - 春川由美子「復員省と占領政策」
  - 瀬島龍三「体験から見た大東亜戦争」
  - 阪谷芳直「私の体験した敗戦と戦後」
  - 小野寺百合子「一九四五年のストックホルム」
- ・厚生省引揚援護局『引揚げと援護 30年の記録』1977
- ・浜井和史『復員関係史料集成』ゆまに書房 2010.4
  - 第12巻 史料解題……全巻の史料解題＋復員関係研究解説
- ・加藤聖文『「大日本帝国」崩壊 東アジアの1945年』中公新書 2009.7
- ・増田弘編『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』慶応義塾大学出版会 2012.11
  - 加藤聖文「第1章 大日本帝国の崩壊と日本人引揚問題」

加藤陽子「第2章 日本軍の武装解除についての一考察」

- ・加藤陽子『戦争の論理 日露戦争から太平洋戦争まで』勁草書房 2005.6
- ・蘭信三『帝国崩壊とひとの再移動 引揚げ、送還、そして残留』勉誠出版 2011.9
- ・林英一『残留日本兵 アジアに生きた一万人の戦後』中公新書 2012.7
- ・小林英夫、柴田善雅、吉田千之輔『戦後アジアにおける日本人団体 ―引揚げから企業進出まで』ゆまに書房 2008.3
- ・倉沢愛子他『岩波講座アジア太平洋戦争4 帝国の戦争体験』岩波書店 2006.2
- ・馮青「(研究ノート) 蒋介石の日中戦争期和平交渉への認識と対応―『蒋介石日記』に基づく一考察―」『軍事史研究』特集 日中戦争をめぐる歴史認識 45 巻 4 号通巻 180 号 H22 年 3 月
- ・黄自進『蒋介石と日本―友と敵のはざままで』武田ランダムハウスジャパン、2011.1
- ・黄自進『蒋介石與日本―一部近代中日関係史的縮影』中央研究院近代史研究所、民国 101 年 12 月

cf. 「蟻の兵隊」……山西残留

- ・米濱泰英『日本軍「山西残留」国共内戦に翻弄された山下少尉の戦後』オーラル・ヒストリー企画、2008 年 6 月
- ・城野宏『祖国復興に戦った男たち 終戦後、四年間も中国で戦った日本人の記録』不昧堂出版、平成 22 年 10 月
- ・宮崎舜市『支那派遣軍の終戦並復員概況』（ゆまに『支那派遣軍に関する兵団長・幕僚の手記綴』所収）

職初関係事項は期章に一括してその経緯を記述したので日記抄からは省くことにした。第十一章まで同様である。

七月二日

朝、總司令部最後の引揚者である将兵軍曹三百九十名を見送り、九時すぎ小林総参謀長等軍曹の乗った軍曹のトランクに別れを告げた後、私は自動車で程近い金銀街の總参謀班宿舎に入った。

敵機西の西郊で、元日本大使館（最近までわれらの機轉事務所の西方約四百米の畑の中に四棟の二階建木造住宅があり、その南側二棟を従来日本大使館が借りて官舎の一部として使用していたのをわが總参謀班が引継ぎ借用することにしたのである。

新しい移転であったが、昨日米諸員夜半の努力で班の要の荷物の約半分を運搬し、本日も全日を費してやつと所要物件全部を運搬することができたが、その整理にはあと数日を要した。

新に中国人のコック、阿媽三人を備へ入れた。

七月三日

金銭開きとして總員十五名会食した。

南京總参謀班室員次のとおり。

部門でもある。私は特に宗教関係や立寄関係のものを讀むことにした。

二宮重彦少佐と米瀆副官が来室して云うには、今まで匿していたが、私の去る二月の吾の傷は検査の結果、結核性であり、喉検査の結果も陽性であり、結核に犯されていることはいままでのことであろう。この際養生所にせられたいということで、養生法を示された。

私はこれ聞いて別に驚きもしなかつた。壮年時から随分身体に無理をしたから、この年になつて結核菌に負ける位のことには致し方あるまい。ただ若し人に感染させては申され無いかから新彦少年には特に留意することとし、また本日た。聊か休むいが仕方がない。

(筆致に同じしては前述のとおり別に彌清日記に纏めたので以後所望の場合の外日記抄から省する)

ラジヲ放送によれば、東京の軍事放送で、田中隆吉少将は、証人として瀧州事委其他の史実を暴露したという。

七月七日(日)

在上海の延原大佐来訪、同地の状況を報告した。

班長

今井武夫少将

宮崎輝中佐、小笠原清中佐、伊藤武雄中佐、佐、二宮重彦少佐、岡田嘯託(瀧沢色)、三三六尉、鈴木大尉、丸山権尉、大野運三、伊藤運三、杉浦(今井少将当番)

岡村大将、米瀆副官、新盛(岡村当番)

中国側連絡特校 黄金亮少尉

七月五日

宿舎内の整頓、門扉の修繕等諸員忙し。中国政府に徴用中の特情関係軍属三名来班して電氣器材、ラジヲ等の修理をしてくれた。

何藤欽將軍は米國へ赴任することとなつたので一言謝意を表したく、約三週間前から面談を申込んでおいたが、同氏は数日前より各道へ出張し、帰營後も極めて多忙で、昨日四日既に出発したとこので遂に挨拶の機を失した。

七月六日

いろいろの交渉や、拘禁所差入れ等外出者も多く班員は相当多忙であるが、私は用務も無くいたつて閑で、読書したり、庭内を散歩したり、囲碁を試みたりの生活である。書籍はすいぶん多量残してくれたので、各種各

したが、高級特員、憲兵など、また約一千三百名が足止めされた。十二日記事参照)延原自身も残留したいと強く申立てるのでこれを承認した(第五章参照)

六月十日で私に對し南京日本官兵總後援連絡班班長となり各地連絡班を尊して停廢徴用者に関する業務をとるべき旨の訓令を國防部から受けた。

しかし連絡参謀の説明によれば、南京總参謀班長は今井少将が應召されているが、この際私に何等かの任務を与えなければならぬ事情があるので、斯く訓令されたのであるという。

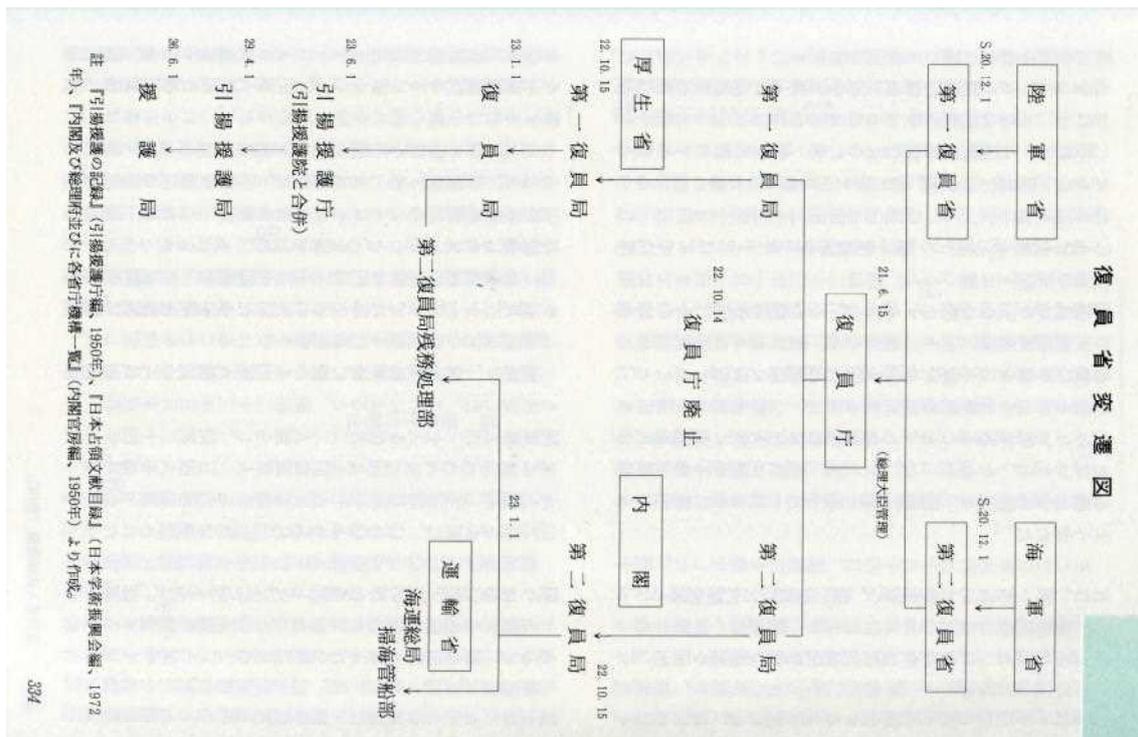
七月十日

敵機の理髮師を招き班員一同散髪、今後月概二回とすることにした。

門の改築、自動車庫の新設、垣根の修理等延原の改装はその全部を終了した。その費用百万元は所持の米で支払うこととし、米袋三十箇を支出したという。

七月十二日

二、三日前から定められた日課時刻のとおり。



【復員省変遷図：春山由美子「復員省と占領政策」】

(1)加藤氏は、本報告での引用部分に続けて「目下の所は中国側の総軍一本立ての希望ある趣に付、日本軍涉外委員会を設置し、在支各公館がこれに協力、事務の処理に当るは適当且必要と認めらる」との重光葵外相 9 月 10 日付電文を引き、引揚機関一本化の要望が中国側からあった、としている。いぶかしがっているような引用の仕方であるが、国府側としては当然の対応であろう。軍組織が解体してしまったら、それこそ混乱の中で何が起きたかわからないであろう。山西の「蟻の兵隊」の悲劇や、生きるために土匪化する旧日本軍が現れる可能性さえ否定出来なかったのではないだろうか。

(2)小林英夫・柴田善雅・吉田千之輔編『戦後アジアにおける日本人団体—引揚げから企業進出まで』ゆまに書房、2008 年 3 月、11 頁。

(3)『支那事変の回想』みすず書房、1964 年 p.203 およびその増補版である『日中和平工作』みすず書房、2009 年 p.183 では河南省とあるが、『何柱国將軍生平』(中国文史出版社、1992 年 10 月 p.219) では安徽省となっている。新站集は河南・安徽省境にあたり、戦後の行政区画改編で安徽に移管された。